聖書：マルコの福音書 4：21～34

説教題：神の国のたとえ

日時：2025年7月27日（朝拝）

前は種蒔きのたとえを読みました。そこで描かれていましたように、イエス様の神の国の宣教活動はまさに種蒔きにたとえられます。イエス様は軍事力を見せつけ、人々を力でねじ伏せて、神の国をもたらそうとはされませんでした。イエス様の活動は農夫のような活動でした。蒔く種は小さなものです。これは御言葉を指すとイエス様は解説されました。このような方法は地味であり、弱々しくも見え、また軽んじられやすいものです。実際これまでイエス様に対する多くの反対や敵対的反応が記されて来ました。たとえの最初に出て来たいくつかの土地のように、イエス様が蒔いた種は受け入れられなかったり、あるいは一時的に受け入れられても結局実を結ばない状態にありました。これだけを見るなら虚しくも思います。しかし種蒔きのたとえは、イエス様による神の国の宣教は必ず多くの実を結ぶことを語っています。良い地に蒔かれた種は30倍、60倍、100倍の実を結びます。神の国とはこのようなものです。御言葉の種は必ず良い地を見出し、驚くべき結果を出します。ではその種を受け止める私たちの心はどんな土地なのか？ということも語られました。イエス様は御言葉を聞いて受け入れる良い地であるようにと私たちに勧めています。

今日の箇所はこの話の続きです。今日の箇所には4つのたとえ話が続きます。まず一つ目は「明かりのたとえ」です。この明かりとは何のことでしょうか。ただイエス様のたとえを聞くだけでは良く分からないかもしれません。21～23節：「明かりを持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので、明らかにされないものはありません。聞く耳があるなら、聞きなさい。」 イエス様は何を仰りたかったのか、分かったでしょうか。明かりとは何かについて二つの解釈の可能性があります。一つはこれは神の国のメッセージを指すということです。神の国の真理、あるいは福音と言っても良いと思います。もう一つの可能性は、この明かりはイエス様ご自身を指すというものです。イエス様はヨハネの福音書8章12節で「わたしは、世の光です」と言われました。細かい話をすると、この21節は「明かりが来るのは」と訳せます。明かり、つまりランプが自分の力で来るということは本来できません。しかしこれはイエス様を指しているとするなら、明かりが来ると言うことは

できます。ですからこれはイエス様ご自身を指す可能性が高いと述べる注解者も多くいます。結論としてはどちらの解釈も受け入れることができ、ほとんど同じ意味を持つと言えます。明かりはイエス様であり、またイエス様がもたらしている神の国の真理という光であるということです。

それは「升の下や寝台の下に置くためでしょうか」と問われているのは、そのように見える状況がこの時、あったからです。イエス様の光はあまりはっきりは良く見えていない。まるでテーブルの下に隠しているかのようなようである。もっとはっきり皆が分かるように表すことができないものかという思いがある人々の間にはあった。これに対してイエス様は「隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので、明らかにされないものはありません」と言われます。つまり今隠れた状態、あるいは秘められた状態にあるとしても、それで終わりになることはない。必ずそれはあらわにされ、明らかにされる。ですから22節にある通り、「聞く耳があるなら、聞きなさい」と勧められています。今、隠れたような状態にあるからと言って、これを軽んじたり、それを投げ捨ててはならないということです。

確かにイエス様がこの話をされた当時は、イエス様の光あるいは福音の光は燭台の上に置いて周囲を明るく照らす状態になかったかもしれません。しかしやがての十字架と復活を経て福音は強い光を放ち、さらに再臨の日にイエス様は大いなる栄光をはっきり輝かせて地上に来られます。それは誰もが見ることとなります。そのような日が来るのです。ですから今の状態を自分勝手に過小評価することなく、「聞く耳を持つ者は良く聞きなさい」と勧められているのです。

二つ目の「秤のたとえ」も同じです。イエス様はまず「聞いていることに注意なさい」と言います。これがポイントです。そして言われます。「あなたがたは、自分が量るその秤で自分にも量り与えられ、その上に増し加えられます。」これも分かりやすいようで意外と分かりにくいものです。これは何を語っているのでしょうか。この秤とはイエス様の言葉を聞こうとする私たちの心の広さのことです。どれだけ受け止めようとしているか、どれだけ注意して聞こうとしているか。その秤が大きい人は、その秤に従って量り与えられます。この「与えられる」とはいわゆる神の受動態です。神の名を出さずに、神がしてくださることを表現する方法です。受け止めようとして心を大きく開いて御言葉を聞く者に神はそれに見合う分だけ豊かに量り与えてくだ

さる。そればかりか、さらに増し加えられるとあります。これも神がしてくださることです。その人は神の国のこと、イエス様に関する真理がもっともっと良く分かる者にされるのです。

ですから 25 節が続きます。「持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです。」 24 節で見たように大きな秤でイエス様の御言葉を聞こうとする人は益々豊かに与えられる一方、反対の人は益々持たない者、持っているものまで取り上げられる者になってしまいます。ですから今日私たちが御言葉をどのように聞くかは、今日だけの問題ではありません。今日良く耳を傾けて聞く人は次回聞く時もっと分かり、もっと多く持つ人となります。持っている人はさらに多く与えられます。一方今日心を閉じて注意して聞かない人は、次回もっと分からなくなり、気が付いた時にはすべてが取り上げられているという状態になっているかもしれません。ですからイエス様は「聞いていることに注意しなさい」と言われるのです。私たちの心はどうでしょうか。私たちは大きな秤をもって良く聞き、豊かに与えられ、実を結ぶ者となる道こそを進みたいと願います。

さて、もう二つのたとえが今日の箇所にはあります。こちらは「神の国のたとえ」と言われています。これまでは御言葉を聞く私たちの態度にチャレンジを与えるたとえでしたが、この後の二つは神の国の性質について語っているたとえです。まず 26～29 節は「蒔かれた種のたとえ」です。イエス様は「神の国はこのようなものです」と言われた後、「人が地に種を蒔くと」と語り出します。しかしその後、言われているのは、その種は人手によらずに成長し、実を結ぶということです。種を蒔いた人は夜昼寝たり起きたりしています。彼はいつもの生活をします。そうしている内に、つまりその人の知らない間に種は芽を出します。どうしてそうなるのか、その人は知りません。その人の知らないところで、そのための力が働いて、芽を出させています。そして 28 節に「地はひとりでに実をならせ」とあります。この「ひとりでに」という言葉も、人間がここに関わっていないことを強調する表現です。実をならせるにはプロセスがあります。初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。これは人間のコントロールによるものではありません。ひとりでにそうなるのです。これはもちろんただ自然の力をたたえているのではなく、神がそのように働いているということを言っています。すべては神のスケジュール、神のタイミングで事は進行し、ついに収穫に至ります。神の国はこのようなものだとイエス様は言っておられるのです。

私たちはともすると神の国を人間の力で広げられるように思っているかもしれませんが。人間の計画や人間の戦略によって神の国拡大を図り、またその進み具合をスケジュール化できるかのように。しかしそうでないということをこのたとえははっきり語っています。もちろん種を蒔いたり、水をやったり、必要な世話をすることはできます。しかし後は神のタイミングで進みます。しかもそれは人間が気づかない仕方です。農夫はそのことをわきまえ、神の不思議な力に驚き、お委ねしながら、収穫の時を待つのです。神の国とはそのようなものです。

30 節以降の「からし種のたとえ」も同じです。からし種は当時の世界で最も小さいものの代表です。しかし地に蒔かれるとどうなるでしょうか。それは生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張って、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。これは「小さな始まり」と、そこから考えられない「大きな結果」との対比を強調するものです。ですから今、小さいからと言って神の国を軽んじてはならないということです。今のレベルからは考えられない大きなものを神は後の日に完成されます。神の国とはそのようなものです。その枝に「空の鳥が巣を作れるほどになる」とある部分は、旧約聖書の表現を背景として、多くの異邦人が救われ、そこに宿るようになることを暗示するものと思われます。私たちはそのように、たとえ目に見えている神の国が今小さく思われても、これを尊び、将来の素晴らしい結果につながっていることを覚えて、神の力を信じ、従う者でありたいと思います。

最後の 33～34 節はたとえに関するこれまでの言葉のまとめとなる部分です。33 節に「イエスは、このような多くのたとえをもって、彼らの聞く力に応じてみことばを話された」とあるのを読むと、イエス様は人々の聞く力に合わせて、たとえを使って分かりやすく、かみ砕いて教えられたというように読めますが、そうではありません。それは 34 節も読むと分かります。イエス様は「たとえを使わずに話されることはなかった」とあり、「ただ、ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた」とあります。つまりたとえを聞くだけではその意味は分からなかったということが言われています。前回 11～12 節で見た通り、たとえは聞く人々を二つに分けます。たとえ話は一見分かりやすく、親しみを覚えますが、ある人々はそれを聞いて何となく分かったつもりになって、そこにとどまり、結果的に大事な真理をつかまぬまま終わってしまいます。一方ではたとえの真の意味を求めてイエス

様のもとにとどまり、イエス様から親しく説き明かしを受けて、たとえが示す深い真理に生かされる人もいます。ですから私たちはただ漫然と聞いて、たとえの表面的な意味を知って、それで終わりにすることなく、良く注意して聞き、イエス様のみもとにとどまり、イエス様との交わりを通して、さらに親しく教えられて行く者でありたいと思います。

果たして私たちは今日読んだたとえから何か益を受けたでしょうか。これらのたとえを通してイエス様のこと、神の国のことについてより深く知り、その真理に養われて生きる者でしょうか。それとも表面的な意味を知って、それで良しとし、あとは立ち去り、結局は聞かなかったのと同じ生活を送る者でしょうか。今日のたとえを通して私たちは人間の思いとは異なる仕方で神が働いておられることを教えられます。時に私たちも今日の箇所で見たとような問いを持ちやすい者です。なぜ神は力を持ち、すべてを支配しておられるなら、神の国をもっと分かりやすくこの世に示さないのか。イエス様という光を誰もが認めるような仕方で輝かせないのか。むしろ現実を見ると、神の国は本当にあるのかどうか良く分からない状態にある。自分はそれを味わって、それがあることは分かっているつもりだが、あまりにも弱々しい状態でしかない。神の国は目に見えて成長しているとは思われない。なぜ神はもっと力強く、誰が見ても分かるような方法で現してくださらないのかと。そのようにイライラし、自分の思い通りではない現状を誰か他の人のせいにしたり、あるいはこの小ささを嘆いて軽蔑し、ついにはこれを捨て去ってしまうという危険はないでしょうか。むしろこの世の中でもっと大きく、また強く見える他の何か心に惹かれて行くことはないでしょうか。

しかしイエス様は今日のたとえを通して神の国は人間の思いを超えて、人間の知らないところで、人間の気づかないところで確実に進んでいると言っておられます。種が地に蒔かれた後、それは土の中で成長し始めます。地上の様子しか見えない人間は何も変化はないと思っています。しかし地面の下の見えないところで、それは日々着実に成長しています。神の国とはそのようなものです。そして時が来れば芽を出し、人々は突然のことでアッと驚きます。そして穂ができ、やがて多くの実がそこにできます。どうしてそうなるのかは人間は全く知りません。それは神がなさるわざなのです。ですから私たちは焦らずに、人間の力で神の国の進展をスケジュール化できるかのように考えずに、神の働きを信頼することが求められています。私たちは自分のできること、すなわち種を蒔いたり、水をやったり、世話をすることはします。しか

し神の国の成長は神にかかっていることであり、神のわざです。それゆえに神のタイミングによって必ず成功へと至ります。

実際この時のイエス様とその周りにいたガリラヤにおける小さな集団は、からし種一粒のような存在でしかなかったでしょう。ところがイエス様の御言葉通り、キリスト教は全世界に拡がり、大きな影響を与えるものとなりました。当時の誰がこれを想像できたでしょうか。今日の状況も最終的な成就と比べるなら、まだまだ小さいと言わざるを得ません。私たちも日本においてまさにからし種のような存在です。こんな小さな神の国の現れに何の意味があるか？と思ひやすい。ともすると軽蔑したくなる心さえ起こって来るかもしれません。しかし今の状態からは考えられない日が来ます。からし種は大きな木につながっています。最後の栄光の日につながっています。そのゴールに向かって神が今日も種を用いて着実に働いておられます。私たちもこのたとえの真理に生かされて、与えられている小さなみことばの種を尊び、これに良く注意して耳を傾けて聞く者たちでありたいと思います。そして益々豊かに知る者、また持つ者とされ、30倍、60倍、100倍の実を結ばせていただく者とされたいと思います。またイエス様とともに福音の種を蒔き、見守る歩みをしたいと思います。これは神の働きであり、偉大な将来につながっています。決して空しく終わることがありません。そのことを私たちは信じ、喜びと希望をもって種を蒔き、神の力によって素晴らしい収穫の日、栄光の日へとつながる今日の歩みをささげて行きたいと思うのです。